

縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器

— 鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介 —

白井 久美子・小林 清隆

1. はじめに

君津市六手に所在する鹿島台遺跡の調査は、館山自動車道（木更津～富津線）の建設に伴い平成12年度から開始した。調査期間は平成14年度までであるが、これまでの調査によって、縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡であることが明らかになってきた。成果の一部については、平成13年10月13日に遺跡見学会を開催し¹⁾、調査中の遺構と出土遺物を公開したほか、当センター発行の広報紙『房総の文化財』第27号の中で速報を伝えた²⁾。調査途中の主な成果は、弥生時代中期の環濠集落の検出をはじめ、同時期の方形周溝墓群の存在、弥生時代後期の大規模な集落形成、古墳時代中期の円墳と副葬品の出土品等である。

以上の成果は、平成13年度の上半期までに調査を行った北側の調査区に限られている。その後調査も進み、新たな興味深い発見も増加している。その中で今回特に紹介したいのは、南側の調査区で検出した縄文時代後期の大型住居と、古墳時代中期の竪穴住居から出土した須恵器に施された線刻についてである。前者は現在のところ君津地域のこの時期の竪穴住居としては、最大級の規模を有する遺構であり、後者の線刻は舟と見られることから注目される資料と考えられる。

2. 遺跡の位置と環境

遺跡は君津市の中心街から南東に約4 km、現在の海岸線からは7 km東に入った丘陵地域に位置する。遺跡の立地する丘陵は、小糸川に面する標高45mの北端部から、標高70mの南端部にかけて一見河岸段丘状の地形的変化を示し、遺跡内で約25mの比高が認められる。

遺跡周辺や小糸川両岸には、各時代の遺跡が多く分布している（第1図）。本遺跡と同じ丘陵上には鹿島台古墳群の存在が知られ、台地北端部には6世紀中葉に築造された、前方後円墳である狐山古墳³⁾が所在する。狐山古墳の北西部の丘陵には奥中古墳群があり、その一部は調査が実施されている⁴⁾。対岸の丘陵には、

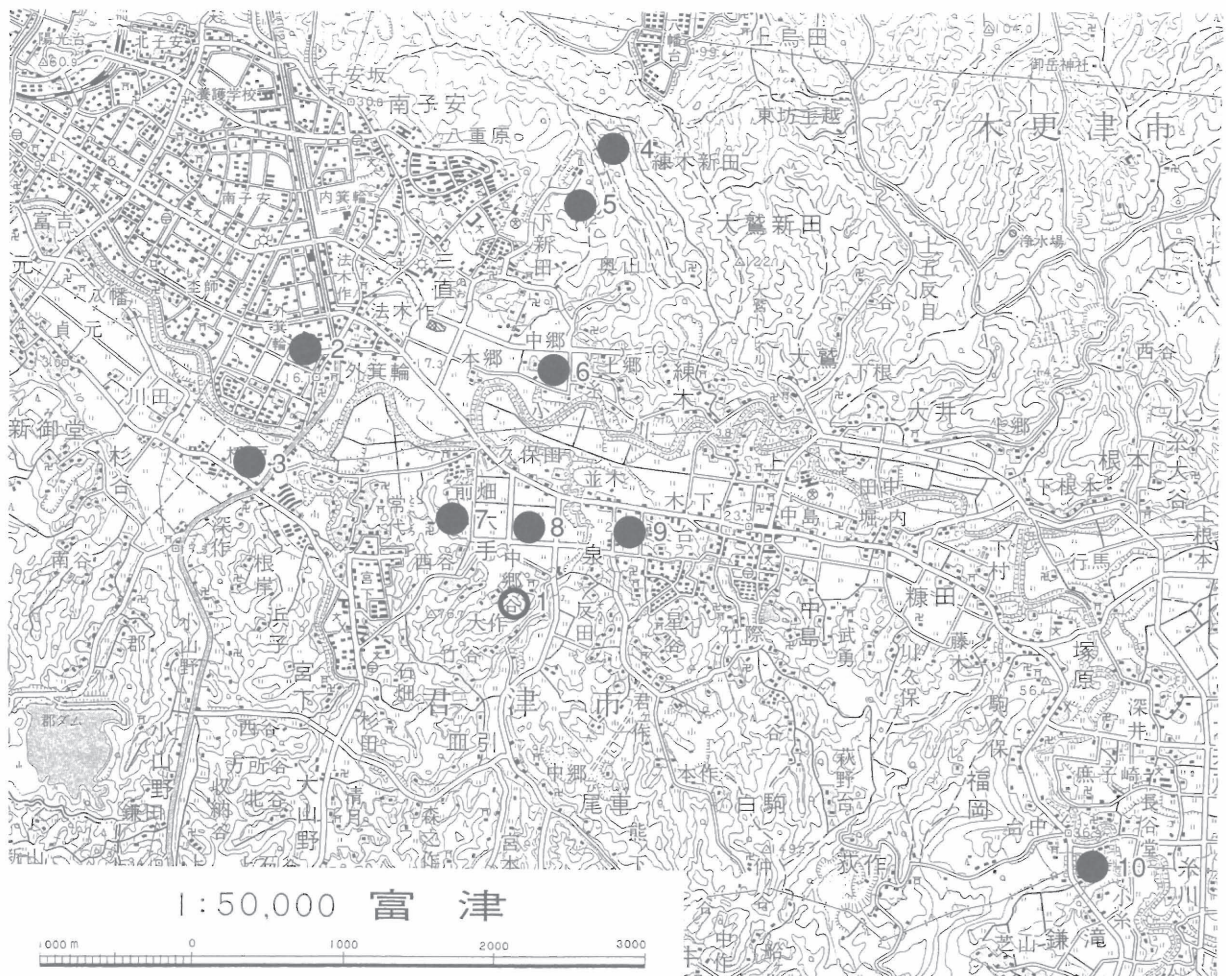
縄文時代後期から晩期にかけて営まれ、盛土遺構が発見された三直貝塚⁵⁾が所在している。また、小糸川の沖積地右岸には、主に古墳時代後期から中世の集落が検出された三直中郷遺跡⁶⁾が所在し、左岸には古墳時代後期の姥田遺跡⁷⁾が展開している。下流域の低地を見ると弥生時代の遺跡として知られる常代遺跡⁸⁾が調査され、上流域の台地上には弥生時代中期の環濠の一部を明らかにした畝山遺跡⁹⁾が存在する。このように当地域周辺には、低地から丘陵上まで立地条件を問わず、しかも近接して遺跡の分布する状況が認められる。

3. これまでの調査概要

調査は工事予定地内の28,470㎡を対象に平成12年4月から開始し、年度計画に基づき平成14年9月までの予定で実施した。平成12年度に確認調査を実施した結果、竪穴住居や土坑等が著しく重複して存在していることが判明し、対象面積の約83%に当たる23,520㎡を上層遺構の本調査範囲とした。

調査では、南北に長い調査区を便宜的に区割りして呼ぶこととし、地形的特徴から北端の狭い平坦地をA区、谷を挟んで南側のやや広範な平坦地部分をB区、さらにその面から一段上がった地区をC区、そこから南の斜面部をD区とした。平成13年度までにA・B・Dの3区の16,310㎡について上層遺構の本調査と下層の確認本調査を行い、さらに鹿島台古墳群の一部を構成する盛土が認められる古墳6基の調査を実施している。なお、先にふれた南側の調査区というのは、D区を指していつている。

検出した遺構は、調査区によってそれぞれ異なる特徴を示す傾向が認められる。まず小糸川を北に見下ろすA区では、弥生時代中期の宮ノ台期の方形周溝墓11基と、それらに先行する時期の再葬墓1基が発見され、弥生時代中期の墓域であることが明らかになった。方形周溝墓はいずれも四隅の切れるタイプで、埋葬施設は発見されなかったものの、溝の土器は、多くが宮



1. 鹿島台遺跡 2. 外箕輪遺跡 3. 常代遺跡 4. 練木遺跡 5. 三直貝塚 6. 三直中郷遺跡
7. 奥中古墳群 8. 姥田遺跡 9. 泉遺跡 10. 畝山遺跡

第1図 鹿島台遺跡と周辺の主な遺跡

ノ台式でも古い様相を示している。再葬墓は155cm×130cmの不整形円形プランをもつ深さ20cmの土壌で、いわゆる須和田式の壺3点が横位の状態で出土した。

B区は8,220㎡の平坦面が広がる地区である。この地区からは、弥生時代を主体とする261軒もの竪穴住居や、V字溝、方形周溝墓、土坑等が検出された。断面V字形を呈する溝は、B区北端からC区に向かって、西に緩やかに張り出す弧を描くように延びている。途中から東側にもう一条のV字溝が並行して発見されたが、両者はB区の南で合流して一条になる。合流地点での観察から、構築時期には前後関係が認められ、先に長さの短いV字溝が掘られたことが明らかになった。後に掘られた溝の深さは、遺構検出面から深い部分で1.2m前後で、覆土の上層から中層にかけて宮ノ台式土器が出土している。この溝は、地形的に判断して、東側に広がる台地平坦部を巡り、集落を囲むように掘られた環濠の一部と考えることが妥当である。ところ

で、B区内で検出した宮ノ台期の竪穴住居は36軒存在するが、その検出状況を見ると、環濠の内側になるであろう調査区の東側とともに、環濠の外側になると推測される西側にも分布していることが判明した。竪穴住居の出土遺物は、宮ノ台式の壺、甕が主体になる。

環濠の北西側のA区寄りの地区には、3基の方形周溝墓が並ぶように位置し、環濠の内側からは方台部の規模が16m前後になる大型の1基が存在する。

弥生時代後期になると、竪穴住居は著しく繰り返して構築されて重複し、古墳時代前期までを含めて214軒になる。弥生時代後期の竪穴住居の平面形は楕円形が主体になり、規模は長径で3mに達しない小型のものから、10mを越す大型のものまで様々である。1軒から出土する遺物、特に土器については、中期に比較して点数が減少する傾向が認められる。弥生時代後期の土器は在地産が主であり、古墳時代前期になると在地産とともに、東海や畿内から搬入されたと考えられる

土器も散見されるようになる。土器以外では、ガラス玉、硬玉製勾玉等の装身具が単独で出土する例もある。

古墳時代前期の堅穴住居の多くは、床面から炭化材や焼土が検出され、いわゆる焼失住居の特徴を示している。そのような中の数軒では、床面からやや上のレベルから、完形の小型丸底壺や高杯がまとまって出土しており、意図的な廃棄行為が介在していたことをうかがわせている。

このように、B区では堅穴住居等の遺構の重複が激しいため、立川ローム層がプライマリーな状態で残存する地域は一部に限られてしまう。そのような地域に、旧石器時代の石器集中地点5か所を検出した。いずれも始良丹沢火山灰(AT)を包含する層の下位、第2黒色帯上層部のⅦ層である。石器石材は透明感のある黒曜石が多く、器種では剥片、ナイフ形石器、搔器が認められる。また、ソフトローム層であるⅢ層で小規模な礫群を2か所に発見した。

D区では縄文時代中・後期、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良・平安時代の堅穴住居合わせて64軒が、比較的良好な状態で検出された。特に縄文時代の堅穴住居は、後世の堅穴住居との重複が少ないため、大きな破壊を免れることとなった。

縄文時代中期の堅穴住居は、斜面の等高線に合致するかなのような分布状況が見られるが、同時期の土坑は1基も検出されていない。堅穴住居の平面形は、円形か楕円形を呈し、中央からやや北側に埋甕炉を設置する例が多く見られる。また、壁際に埋甕を埋設するものも少なくない。時期は加曽利E式の前半期で、曾利系の土器を伴う堅穴住居もある。石器の出土量は僅かであるが、覆土中から多量の黒曜石の剥片や碎片が出土した遺構が複数存在する。後期で特筆されるのが、次項に述べる直径16m内外の規模になる、DSI-018と呼んでいる大型住居である。

古墳時代の堅穴住居は、中期が中心になり、正方形に近いプランを有し、コーナー部に貯蔵穴を設置している。遺物は土師器が大部分を占めるが、古段階の須恵器や石製模造品も出土している。その中のDSI-022から出土した須恵器の1点に線刻が認められた。

古墳は盛土が残存する6基と、発掘によって周溝の存在が判明した8基の合計14基を調査した。その内、A区所在の鹿島台古墳群4号墳は、墳丘盛土内に5基の埋葬施設が検出され、大刀、鉄鏃、刀子、ガラス玉等の副葬品が出土した。同じくA区の、盛土が失われ周溝のみが明らかになった古墳の埋葬施設からは、翡

翠製勾玉、緑色凝灰岩製の細身の管玉をはじめ、3,700点を超える滑石製白玉が発見された。おそらく、1基の埋葬施設から出土した白玉の点数としては、房総において最多になるだろう。

B区に位置する3号墳は、近世に方墳形の塚へと改変が行われ、地元では「崇り塚」と呼んで、現在に至るまで信仰の対象であった。そのため本来の盛土や埋葬施設が失われていたが、周溝内から円筒埴輪が多数出土したほか、須恵器の杯蓋、杯身、滑石製の各種石製模造品が出土し、構築時期を知る多くの資料を得た。

以上のように調査途中ではあるが、320軒を超す堅穴住居が検出され、平成14年度の調査区であるC区においても同様な状況であった。

4. 新資料の紹介

(1) 縄文後期の大型住居

現状では緩斜面となっているD区北東部において、広範囲に黒色土の堆積が認められた。その中の2か所に方形の落ち込みが確認され、古墳時代の堅穴住居の存在が判明した。調査すると2軒とも壁が黒く、床面の下に幾つものピットが認められ、次第に掘り込んだ土層が単なる自然堆積ではないことがわかってきた。当初考えていた、斜面部に自然堆積した黒色土、という認識は誤りで、全体が堅穴住居の覆土だと気がついたのである。もう一度検出面を清掃すると、西側から南側にかけて弧を描くようなプランが検出され、ようやく円形の大型住居の姿が見えてきた。

この堅穴住居は斜面部に位置するため、山側の壁は保存状態が比較的良好であるのに対して、谷に向かう側の壁や床は流出して残存しない。壁の立ち上がりが残るのは、全体の約3分の1にとどまっている。壁を捉えた部分から規模を復元してみると、直径が15m～16mになる。その推定範囲を第4図の平面図に点線で加えてみた。図を見て明らかのように、この範囲の中には多数のピットが存在する。壁が残存する西側では、壁と同心円を描くような配列で、ピット列が2列から3列巡る状況が見られるので、ピットの多さは数回の建て替えを繰り返した結果であることが考えられる。また、壁溝も部分的に数本観察できる。掘り上がった姿は、拡張を繰り返した最後の状態であるが、各時期に伴う柱穴は今のところ明らかになっていない。出入り口についても、それを示す柱穴配置が明確にならないため確定はできない。ただ候補としては、住居の中心から見て北の方向か、そこから東の間に存在してい



狐山古墳
● 39.80

姥田遺跡
● 21.81

A区

● 46.80

● 47.43
B区

● 53.04
C区

D区

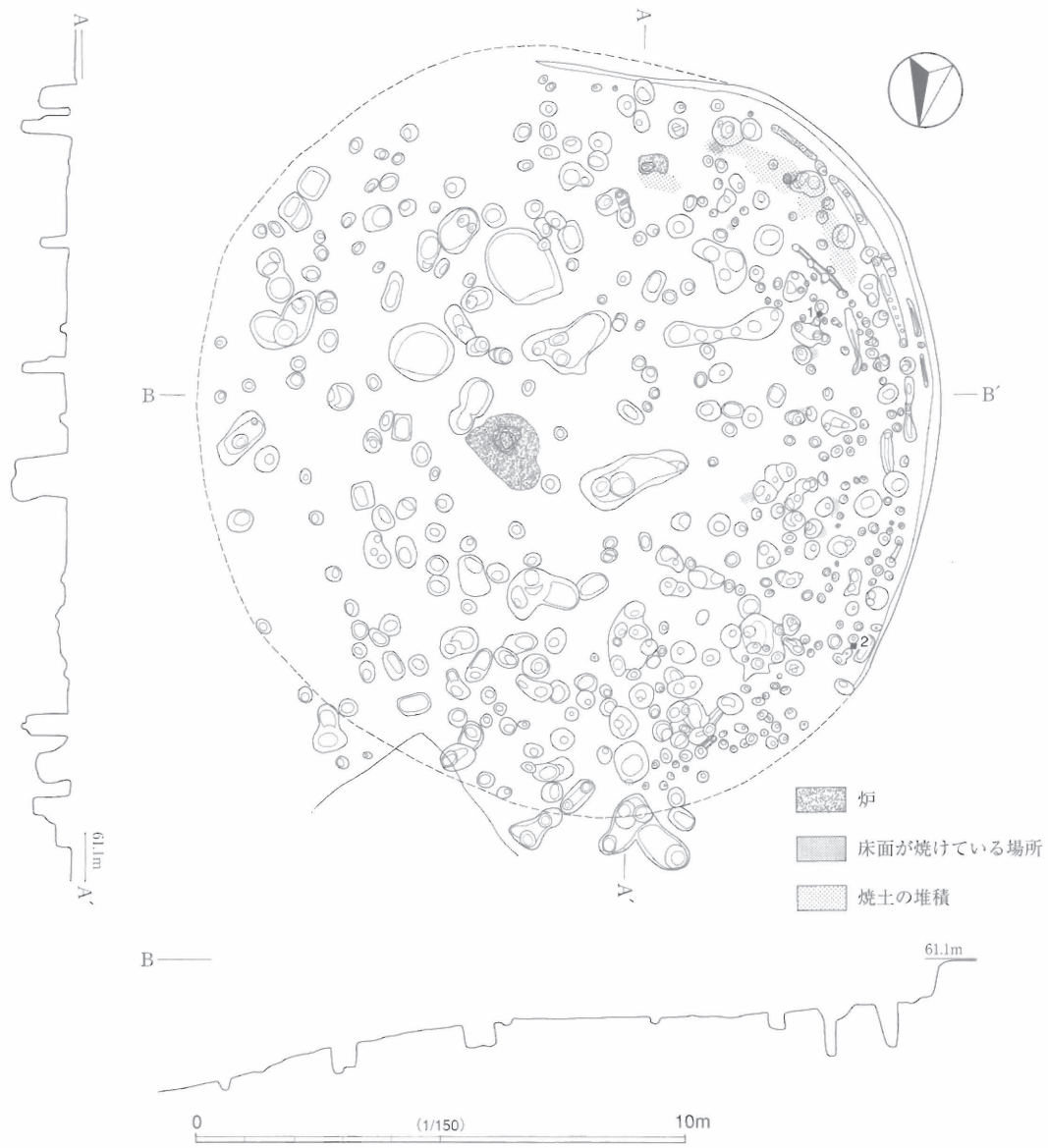
● 73.20

0 (1/2,500) 200m

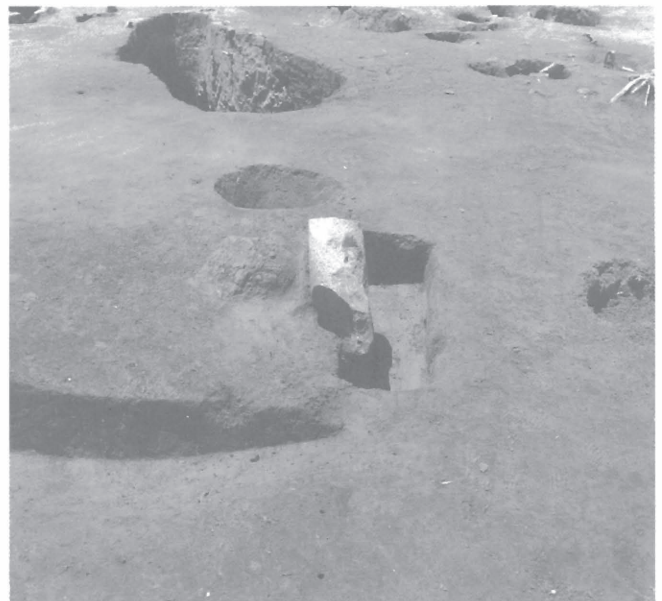
第2図 鹿島台遺跡の地形と遺構配置図



第3図 D区遺構配置図



第5図 DSI-018区全景



第6図 DSI-018の炉と石棒

た可能性が大きい。

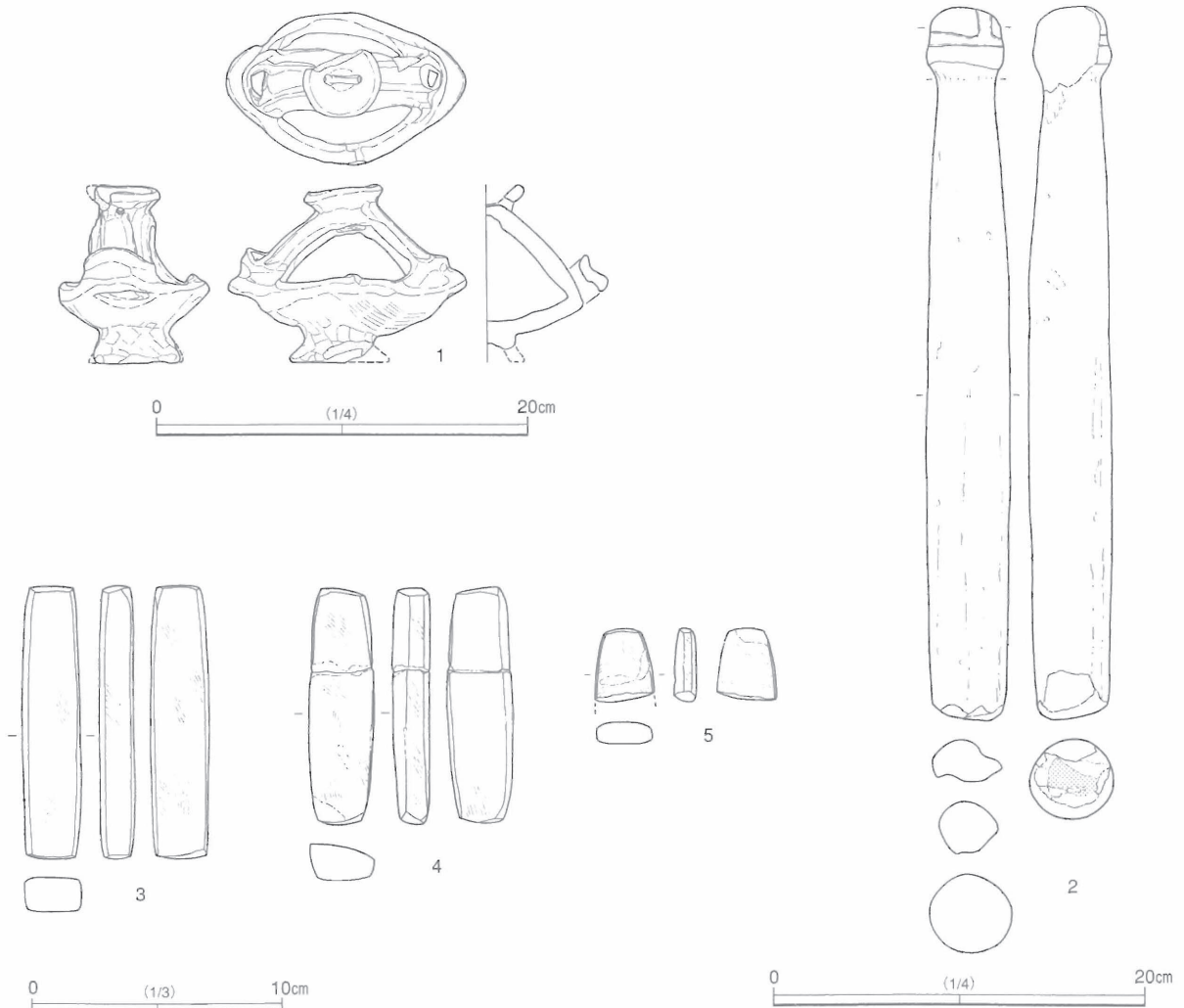
炉は中心から僅かに東側に寄った位置に設けられている。粘土質の床面を僅かに掘り込んで作られ、遺存部分での火床部の長径は170cmに達し、赤く変色して硬い。長期にこの場所が使用されたのであろう。この大きな炉と壁の間にもう一か所炉状の施設が存在し、床面が赤く焼けている場所も数か所検出されている。阿部芳郎氏の指摘する「周縁炉」¹⁰⁾になるだろうか。

出土遺物は僅かである。覆土中からは土器片が出土しているものの、保存状態の良い大型の破片は少なく多くが細片である。床面から出土した遺物も、保存状態が良好な土器となると数点にすぎず、それも住居の中央部ではなく壁に近い位置から出土している。遺物とは別に、覆土中に炭化粒や焼土粒が含まれており、壁の下の一部には住居の周縁を巡るような状態で焼土が堆積していた。

調査中に目に留まった土器は、精製の小型深鉢、釣

手土器、異形台付土器等である。第7図-1は床面から出土した釣手土器である。台の一部と釣手頂部の一部をそれぞれ欠くが、ほぼ完形の状態でも出土した。体部は長径12.9cm、短径8.1cmの楕円形に作られ、高さは9.6cmある。釣手は長径の両端部から付けられ、頂部に直径4.2cmの把手があり、釣手方向に穴が開けられている。さらに釣手の取り付け部には橋状の把手が付いて、体部から釣手頂部にかけて紐がとおされていた状況が想像できる。体部に条線が認められるほかは装飾に乏しい。胎土に砂を多く含み、ザラザラとした質感になっていて、色調は灰黒褐色や明るい褐色を呈している。

石器・石製品では石棒、砥石状品、剥片が出土している。第7図-2は床面に近いレベルで、横位の状態で出土した石棒である。頭部に欠損があり、基部が切断されたようにも見えるが、ほぼ完存している。長さ38.6cm、最大部の断面は4.55cm×4.30cmの円形である。頭部に線刻が施され、基部の端部は磨られている（図



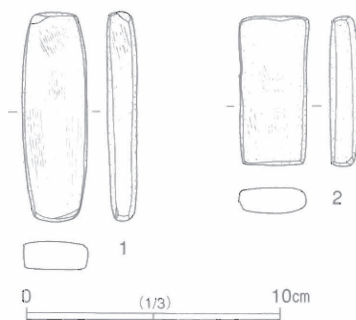
第7図 DSI-018出土遺物

の網の範囲)。石材は緑色片岩である。また、今回の提示には間に合わなかったが、石棒は別にもう1点出土している。それは頭部を失ったもので、炉の側に斜めに立った状態で出土した(第6図)。本来の長さは不明であるが、直径は10cm以上になる。

第7図-3~5は従来砥石に分類されていた中に発見される石器である。3は長さ11.5cm、幅2.4cm、厚さ1.5cm、重量64gで、6面とも磨きが施されている。石材は砂岩で、煤けたように黒灰色を示す部分が多いことから、火熱を受けたと考えられる。4も3と同形態で、長さ9.6cm、幅2.7cm、厚さ1.5cm、重量56gになる。石材は砂岩でやや赤みを帯びた灰褐色を示し、熱を受けたように見える。5は一部分しか遺存していないが、同様な形状であったと推測される。なお、3・4はピット内の出土である。

本住居の帰属時期の詳細については、今後の整理作業を待って決定されるが、現在の認識では加曾利B式の後半期と考えている。平成11年度から平成12年度に調査を実施した三直貝塚では、後期から晩期に構築された竪穴住居が多数検出されている。その中で最大の規模を有していた竪穴住居は、後期安行式の後半期のもので、長径が11mである¹¹⁾。この竪穴住居が君津市内最大と見られていたのが、時期の違いがあるにせよ、鹿島台遺跡の本住居が、規模の面ではそれを大きく上回ることとなった。近傍での類例では、市原市祇園原貝塚50号住居が長軸長で18.2mの規模をもっている¹²⁾、それと比較したら小さく見えてしまう。

ところで遺物の紹介で挙げた砥石状品は、後期から晩期の遺跡に限って出土が認められるようである。第8図に示した2点は、整理途中の三直貝塚の資料である¹³⁾。また、千葉市六通貝塚でも同形態の砥石が出土している¹⁴⁾。興味深いのは、三直貝塚出土の第8図-1が、形態とともにピット内出土という点でも、鹿島台遺跡の出土品と同様なことである。これらにイ



第8図 三直貝塚出土の墨形石製品

共通点は、石材が砂岩で、定形化した形態もち、出土状況や、火熱を受けた状態に認められ、逆に砥石とする積極的な痕跡は探し難い、という特徴がある。用途は不明であるが、何らかの目的をもって加工された、石製品の一つである可能性が高いと考えられる。類例の蓄積を経て検討すべきであるが、形態が書道に用いる「墨」に似ているので、便宜的に「墨形石製品」と呼んでおきたい。この「墨形石製品」の類例と用途についてお教え願えれば幸いである。

(2)舟の線刻のある須恵器

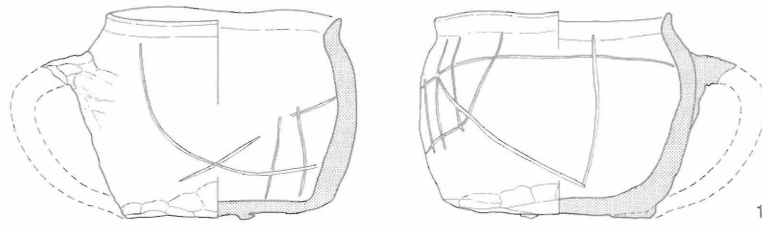
1) 出土状況

舟が線刻された須恵器碗は、D区の022号竪穴住居(DSI-022)から出土した。022号住居跡は、台地南端の標高65m前後の高台に位置しており、眼下に小糸川の支流を望む。一辺4.7mほどの方形の竪穴住居で、北に向かって下がる緩斜面に建てられているため、比較的遺存の良い南側の壁高は60cmであるが、北側の壁は流出して床の範囲も不明瞭である。南西角の貯蔵穴に接するようにカマドがあり、その配置は極めて偏っている。

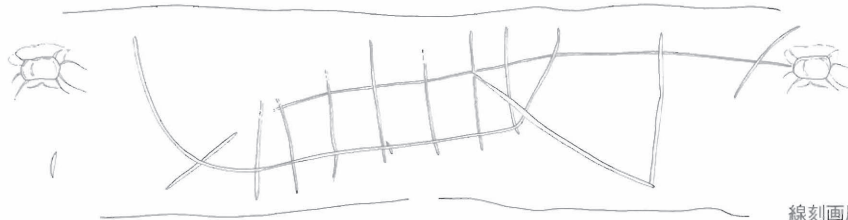
床近くの覆土に大量の炭化材と焼土が堆積し、特にカマド周辺の南西部に集中していた。土器類はその堆積層から出土しており、ほぼ完形の甕や壺を含み、総量は30個体以上にのぼると見られる。カマドの奥部に据え置かれたような状態で甕(第9図-2)が出土し、他の甕の上半部に重ねられていた。カマドの袖がほとんど遺存しないことなどを見ると、これらの甕は既に廃棄したカマドに置かれていたものと考えられる。土器は住居の中央部でまとまって出土しており、これらは住居の廃棄に伴って投棄された可能性が高い。須恵器碗は、西壁寄りの床付近で1.8m離れて出土した破片が接合したものである。

2) 須恵器把手付碗(第9図-1)

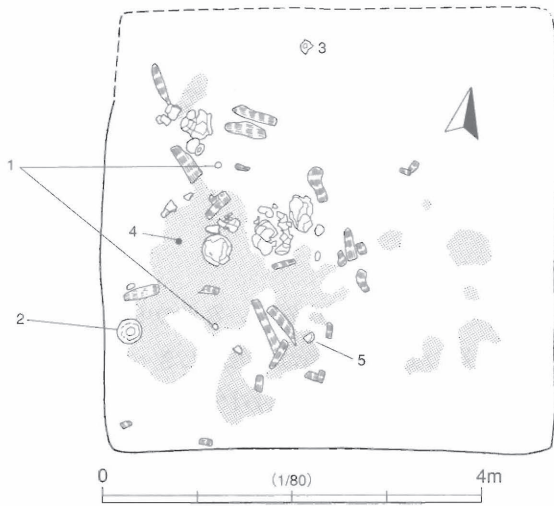
把手と口縁部の一部を除いて遺存している。把手は口縁部側の付け根を残して欠損しており、底部の取り付け部に剥離痕がある。口径5.98cm~6.28cm、高さ5.55cm、底径4.36cm~4.50cmの小型の碗である。短く外反する口縁部は水平ではなく、かなり大きく波打つ。底部付近に緩やかな回転ナデ風の調整が見られるが、底部は小刻みな手持ちヘラケズリによって仕上げられ、ロクロは使用されていないと考えられる。降灰は内外面に及び、外面ではかなり厚く融着する部分があり、一部線刻文に被っている。胎土に1mm前後の黒色粒が多



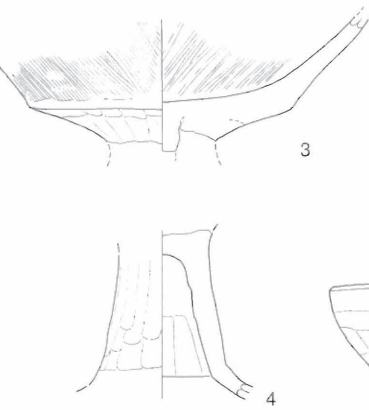
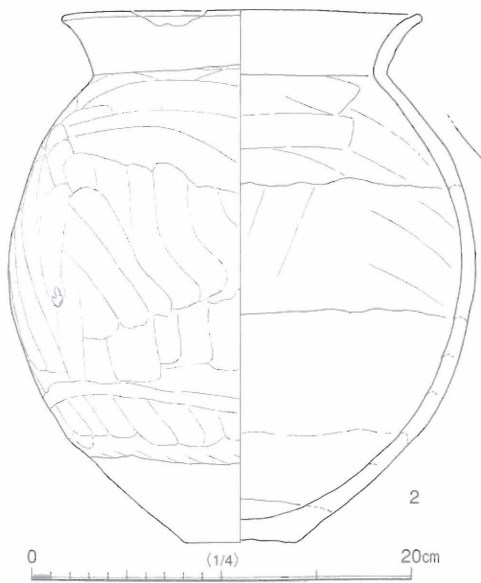
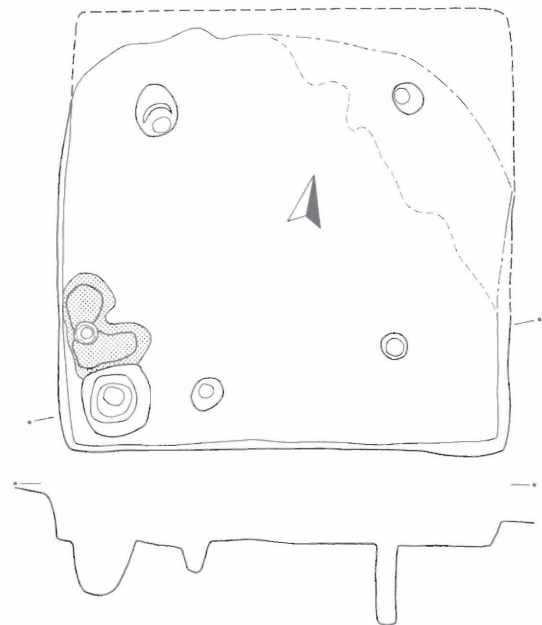
把手付須恵器椀



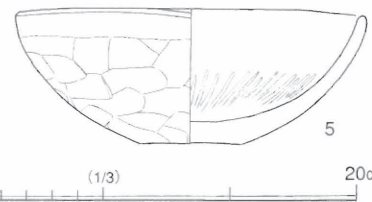
線刻画展開図



遺物出土状況



カマドと甕(2)の出土状況



第9図 D区022号住居跡と出土遺物

く含まれるのが特徴で、非常に良く焼き締まり、口縁部から体部が灰黄褐色～灰味オリブ、底部・断面が明るい茶灰色に発色している。朝鮮半島・列島を通じて類例のない形態の把手付椀であるが、径の割に背の低い器形や底部をヘラケズリによって薄くしているなどの特徴から陶器TK73型式期前後に国内で作られたものと見られる。

線刻文は体部外面のほぼ全面を使って描かれており、船首と船尾が大きく反り上がったゴンドラ形の舟が刻まれている。線の斬り合いを見ると、まず、口縁部に並行する横線を引き、椀を表すと見られる8本の縦線、舟の外形の順に描き、最後に舟を横切るV字状の2本の線と把手付近の線を描いていることがわかる。高く反り上がった方が船首（舳先）と見られる。上部の横線は舷側を表すと見えるが、舟の外にも長く延びており、判然としない。V字状の線は錨綱を表すものかとも思われるが大きすぎる。工房、あるいは工人の符号であろうか。

3) 伴出遺物と須恵器の年代

図示した伴出土器は土師器甕・高杯杯部・高杯脚部・杯の4点である。速報に当たって、遺存の良いものを抽出した。甕は肩部から胴部の張りが弱い形態で、内外面をヘラナデ、あるいはヘラケズリによって調整し、外面に雑なミガキを加えたものである。高杯杯部には口縁部と底部を分ける明瞭な稜があり、外面はハケ調整の後ミガキ、内面には放射状のヘラミガキが見られる。脚部は別個体のもので、杯部の装着方法も異なる。比較的短い中空の柱状部に屈曲して開く裾部が付く。柱状部外面は縦方向のヘラケズリ、内面には横方向のヘラケズリが見られる。杯は小さな平底をもち、緩やかに内湾する形態である。外面は小刻みなヘラケズリによって整形され、内面には放射状のヘラミガキが施されている。これらの土師器の特徴は、古墳時代中期中頃の土器群の特徴を示しており、須恵器の年代に符合するものと言える。

竪穴住居内に造り付けのカマドが出現する時期は、千葉県内でも地域差があり、東京湾東岸の君津市から市原市にかかる地域が最も早く、陶器窯TK216型式期には採用されているのに対し、県北地域ではTK23型式期以降までカマドをもたない。鹿島台遺跡はやや海岸線から奥まっているものの、変革の波及が早い湾岸地域の一角に位置していたことがうかがえる。

土器に描かれた舟の線刻画は弥生時代から見られ、弥生・古墳時代を通じてゴンドラ形の船体に棒状の椀

を表現したものが多い。総じて弥生時代の例の方が写実的で、椀の先端部が木の葉形に表現されているが、古墳時代の線刻画では本例のように直線で描かれる場合が多い。県内では、富津市富士見台遺跡に弥生時代後期と見られる例、市原市天神台遺跡に古墳時代出現期の住居跡から出土した例があり、天神台例は底部に焼成前の穿孔をもつ土師器の壺に描かれている。須恵器の例では、市原市草刈六之台遺跡の脚台付き舟形須恵器に船体の構造を線刻した例があり、中期の円墳周溝と遺跡内の住居跡から出土した破片が接合している。これはTK208型式期の、本例よりやや新しい段階の例である。

古墳時代中期以降になると舟の線刻画は埴輪にも見られ、装飾古墳に描かれた「天鳥船」のような葬送に関わる船を描いた例もある。しかし、多くは水運や流通を担う集団や首長を象徴したものと考えられる。

弥生時代から古墳時代の集落で出土する舟の意匠は、舟形の木製品や土製品も含めて、水上交通の要衝に多く分布しており、本例も水運の恩恵に浴していた集落の様相を語るものと言えよう。

5. おわりに

今年、平成14年の夏は厳しい暑さの中経過した。粘土層や礫層の遺構検出面は、乾燥しきって鋤簾の刃を跳ね返し、移植は全く寄せ付けてもらえなかった。一方、二度本県に上陸した台風の直後には、調査区中央部が水浸しになって遺構の壁が崩壊し、まるで低地での調査を彷彿させる光景が、丘陵の上で繰り返されることとなった。2年半に及ぶ鹿島台遺跡の調査も、残されたC区の調査を、9月をもって終えて完了した。調査区内の総数で480軒を超す竪穴住居をはじめ、多数の遺構と多量の出土遺物は、今後実施される整理作業によって、多角的に分析されるであろう。今後各方面からのご教示を切にお願いしたい。

今回の紹介に当たり、麻生正信、蜂屋孝之、西野雅人、吉野健一の各氏をはじめ、南部調査事務所の職員、補助員の皆さんにお世話になった。なお、執筆については4-(2)を白井が、それ以外を小林がそれぞれ担当した。また、1・2・3については、別に報告した内容と重複する部分が多い¹⁵⁾。

註

- 1) (財)千葉県文化財センター 2001 遺跡見学会パンフレット『君津市 鹿島台遺跡見学会 -弥生時代の環濠集落-』
- 2) (財)千葉県文化財センター 2002 「発掘速報 弥生時代から古墳時代の大集落-君津市 鹿島台遺跡-」『房総の文化財』Vol. 27
- 3) 君津市教育委員会 1988 『君津市内発掘調査報告書』
- 4) (財)君津郡市文化財センター 1996 『奥中谷古墳群発掘調査報告書』
- 5) (財)千葉県文化財センター 2001 「第3回最新出土考古資料巡回展に伴う講演会の記録集」『研究連絡誌』第60号
- 6) (財)千葉県文化財センター 1999 『千葉県文化財センター年報』No24
- 7) 同上
- 8) (財)君津郡市文化財センター 1996 『常代遺跡群』
- 9) (財)君津郡市文化財センター 1986 『富津火力線鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 10) 阿部芳郎 2001 「縄文時代後晩期における大形竪穴建物址の機能と遺跡群」『貝塚博物館紀要』第28号 千葉市立加曽利貝塚博物館
- 11) 註5に同じ
- 12) (財)市原市文化財センター 1999 『祇園原貝塚』

13) 吉野健一氏のご教示による。

14) 蜂屋孝之, 西野雅人両氏のご教示による。

15) 小林清隆 2002 「〈遺跡速報〉君津市鹿島台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』10月臨時増刊号 No.494 ニュー・サイエンス社

参考文献

- 小池寛 1995 「陶質土器盤に関する基礎研究」『古墳時代とその伝統』勉誠社
- 小池寛 1997 「陶質土器の起源について」『堅田直先生古希記念論攷』真陽社
- 定森秀夫 1998 「初期須恵器と韓半島製陶質土器」『朱雀』10 京都文化博物館
- 浅利幸一 1992 「土器に描かれた船」『研究紀要』Ⅱ (財)市原市文化財センター
- (財)千葉県文化財センター 1994 『千原台ニュータウン』Ⅳ -草刈六之台遺跡-
- 君津市考古資料刊行会 1996 『常代遺跡群』
- (財)君津郡市文化財センター 1998 第5回遺跡発表会資料『掘った 見つけた みんなのふるさと-君津地方の弥生文化-』